新門辰五郎伝

早乙女貢

中公文庫

中公文庫

新門辰五郎伝

定価はカバーに表示してあります。

1998年6月3日印刷
1998年6月18日発行

著者 早乙女 貢

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Mitsugu Saotome

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203159-1 C1193 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

新門辰五郎伝

早乙女貢

中央公論社

目次

新門辰五郎伝　5

解説　高橋千劔破　295

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

新門辰五郎伝

一

火事と喧嘩は江戸の華、という。

その火事のない日はあっても、喧嘩のない日はない。気の荒いのは関東の風土である。

奈良朝、平安朝のころから、関東はあらえびすの国と恐れられていた。坂東は草深く平将門が兵馬強壮の実をあげた故智に倣って、徳川家康は、東海地方からの転封をむしろ喜んだといわれる。

江戸は徳川氏のお膝元となって急速に発展したが、この気の荒さは伝統的なものばかりでなく、当初から女性が少なかったのも、要因とされている。

各地から〝江戸〟建設のため集められた男たちは、埃っぽい新開地の乾いた空気の中で一層、荒々しく、喧嘩口論が絶え間なく、殺伐の気が漲っていた。

女性が少ないというだけで、男の気が荒れるのは、いつの世でも、どこの国でも変わりはない。江戸という町は時代とともに肥大化していったが、どこまでいっても、女性が足りなかった。

その一つは、参勤交代で数十万人の男やもめが、江戸にやってくる。江戸詰めの家族連れは上司の一部で、大半は単身赴任である。

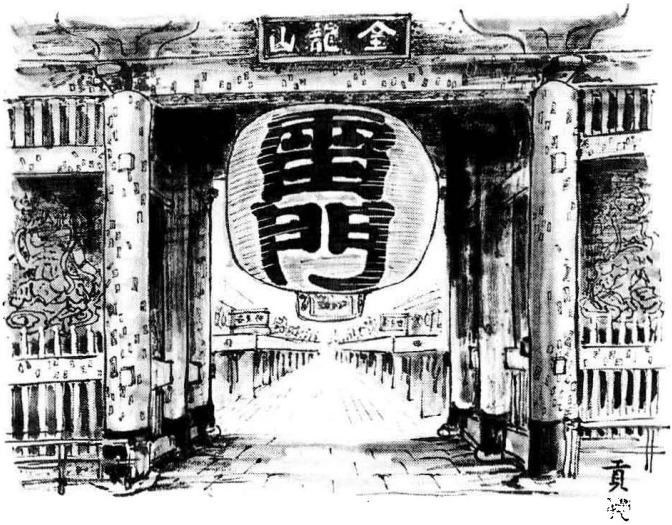
その男たちのために吉原や岡場所が繁盛したが、需要に間に合わない。男たちの気が荒くなり、博奕の流行も自然の要求だった。

むろん、表むきは非合法とされて、禁じられているから、この殺伐の気は和むところがない。

芝居でも祭りでも、いうならば喧嘩の場のようなものだった。喧嘩をすれば、ある程度発散する。間違って、殺人や傷害になれば、軽くて寄場送り、多くは遠島になる。

そんな刑罰くらいしか、荒々しい気は押さえられない。下町では殊に、日常的に、喧嘩を見て育つから、子供のうちから、気が荒い。

寺小屋にでもいって、読み書き算盤を習えば、いくらか気性も和む。が、現代の塾でも同じように、タダというわけにはいかない。伴のために束脩（月謝）を払うく



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

らいなら、酒代にまわした方がいい、という親父を持つと、目に一丁字もない子供が育つ。

下谷山崎町二丁目の飾り職金八の子に生まれた辰がそれだった。

束脩といっても、そう高いものではない。月に二日や三日、お酒を飲まなくても、伜が読み書きが出来るようになれば、有難いじゃないか、と女房のお徳が、機嫌のいい時を見はからっていったが、そんな意見を聞くような男ではない。

「何いってやがんだ、べら棒め、日がな一日、根の詰まる仕事をしているんだ、酒くれえ飲まなきゃア、からだがひん曲っちまわあ」

と怒鳴られて黙るしかなかった。

「どうせ蛙の子は蛙だ、職人の子がお侍になれるわけがねえ、おれだって、字なんざ、知らねえで生きて来たんだ。読み書きなんざ、要らねえ、要らねえ」

飾り職人は、簪や笄など髪のものや、印籠の根付や、家具調度の金具、刀の鍔や目貫や柄頭、鐺など、小さな金属の細工物を作る。緊張の連続で、そのくせ小さなものだけに老いて目が悪くなっては、出来なくなる。金八はそう腕は悪い方ではなかったが、酒を飲み出すと、加減が利かなくなるほうで、そのため、家の中はいつも火

の車だった。

辰が喧嘩に強くなったのは、そんな境遇で、とても菓子一つ、買って貰えなかったせいもある。

子供は誰でも、駄菓子がほしい。小遣銭がなければ、ともだちや他の子供が持っているのを、ふんだくるようになる。いんねんをつけて、威しとるか、抵抗するやつはぶん殴る。喧嘩が強くなければ、菓子は口に入らない。独楽でも竹とんぼでも、竹馬でも、力で奪うしかない。

「野郎、渡さねえか、ぶち殺すぞ」

辰は口だけではない。悪罵と怒号は下町では子供でも日常だった。つけ加えれば、女言葉もまた、実際には、女房も娘も、オレ、と自分のことを言って、字にあらわせば男女の別がわからないほどであった。ただ声だけはかん高く、声質で区別はつく。

辰は手が早く、足もよく動く。言葉は警告ではなく、予告だった。言葉が終ったとき、拳固が相手のどこかを強打していた。あるいは、饅頭や飴を掴みとると同時に、向う脛を蹴飛ばしていた。どうせ、喧嘩になるのだから、早い方が勝ちだと、辰は小さいときから心得ていた。それだけ、菓子やものへの欲求が強かった。

殴られた相手は、家へ帰って訴える。親がねじこんでくる。辰は逃げて帰らない。食事にもありつけない。悪循環だが、それだけ、また他の子供たちが、殴られる率が多くなる。

そんな辰を、養子にした男がいるのだから世の中は面白い。辰が八歳のときだった。

辰の生まれは寛政四年（一七九二）だから、寛政十二年。

この年は、幕府の目が蝦夷地に向いていて北方の危機感から、勘定役人や八王子千人隊を蝦夷地に駐屯させたり、伊能忠敬に蝦夷地の測量をさせるべく派遣したりしている。一方江戸昌平坂学問所が完成して学問が奨励されていた。将軍は生涯五十余人の子を成した家斉の時代である。

辰の養子入りのきっかけは、江戸の華、火事だった。

二

喧嘩も好きだが、火事も好きな辰は、小さいときから、高みへ上りたがった。火事だと聞けば大人たちが屋根の上へ上って、「乾（いぬい）の方角だ」とか、「艮（うしとら）のほうへ飛火し

たぜ」などと大声で叫ぶのが、羨ましくてならなかった。

長梯子がたいてい横手や裏手の羽目板などに掛けてある。それを担ぎ出して、廂へ立てかけ、屋根へ上ろうとして怒鳴られたことがある。二階には物干台がついていたり、出窓になって、手すりから屋根の上へ出られるが、二階の屋根へはどうやって上るのか。天窓がついているところは、踏台を置いて出られるが、普通では難しい。とにかく高いところへ上らないと、遠方の火事は見えないのだ。

各町内には、それぞれ火の見櫓があった。

普段でも、火見番が上っていて、特に風のある日などは見張っていることになっているが、こういう約束事は必ずしも実行されない。

「火事だ」

という叫びで、あわてて、駆け上り、その方角と火の手の多少によって、鐘を叩く。遠ければ、間遠に打ち、近場になるほど、頻打になり自町内に類焼の危機が感じられれば、いわゆる、擂半になる。打つ間隔がもどかしく、鐘の表面を擂るかのような急激さを言いあらわすのだが、そのためにも、火見番は敏捷で、猿のような機敏さを要求される。

むろん、若いことも条件だが、するすると梯子段を駈け上る男の姿は、子供たちにとっても、素晴らしく、憧れの的だった。

辰は火の見櫓に上りたくてたまらない。

だが、

「餓鬼は上るんじゃァねえ」

と、厳しく止められている。

危険だからというのが理由だろうが、辰には、

（大人だけがいい思いをしてら）

という気持があった。

十一月に入って間もなく、空っ風が枯葉を巻き上げ、木戸の音を立てていた。夕暮れになって人通りが少なくなるのを待って、辰は火の見櫓にとりついた。

火見番のように、勢いをつけて、さっさと上っていった。短い裾を風が巻き上げる。

（やったぞ）

辰は思わず叫びそうになった。

半鐘までは僅かだ。あと数段だ。半鐘が風に揺れている。

そのときだった。
突然、地上から声がした。
「馬鹿野郎、降りて来い！」
見つかった。
辰は、
（もう少しなのに）
と、思った。
半鐘のところに手が届けば、ジャン！　と一つ鳴らして降りる。それで本望だ。
その手が届こうというときになって、見つかるとは。
「野郎！　さっさと降りねえか、ぶち殺すぞ、この餓鬼」
怒号とともに、男は上ってくる。仕事師だ。
（ちぇっ、仕方がねえや）
ぶん殴られるだけ損だ。しぶしぶ降りようとした。が、せっかくここまで上ったのだから、強い風に顔を曝(さら)して、下界を見廻した。
その眼に赤いものが見えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo